

# A Study on Group Structure : Focusing on the Multilayer Structure of the Groups Classified by the Degree with Which Members Select Each Other, and Interpersonal Relations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/20586">http://hdl.handle.net/2297/20586</a>

# 集団構造に関する研究； 相互選択集団における重層構造と 対人関係を中心として

太田 雅夫

**A Study on Group Structure :  
Focusing on the Multilayer Structure of the Groups Classified by the Degree  
with Which Members Select Each Other, and Interpersonal Relations.**

Masao OHTA

## I 目 的

集団のソシオメトリ構造は、従来から多くの検討が加えられてきた。ここでは、相互選択関係を中心とする集団構造を、選択の強度による重層構造として把握し、各層内における相互選択者の選択と認知の関連、選択者の認知の正確性、選択者の認知と他者の認知との関連、自己の他者選択と他者の自己選択の関連等について検討することにしよう。

Tagiuri, R. (1952)の述べたように、対人関係の分析には、各人が他者に対する反応の特性と他者が各人に対して如何なる反応をするかに関する各人の認知が要素となる。この研究においても、これらの要素を中心にして相応性や正確性や相互性等について検討することにしよう。この際、符号の一致に注目するとともに、量的な一致度を加味して分析することにした。

## II 方 法

被調査者は小学校4年生2クラスの79名であった。Kクラスは男子17名、女子18名。Nクラスは男子23名、女子21名であった。クラス別、性別に他者全員を選好の程度によって評定させ、さらに他者の自己に対する選好の推定をさせた。このため2種類の評定尺度を用いた。第1調査は、「この組(クラス)のお友だち全員に

ついて、あなたは、どう思っていますか。お友だち一人一人についてこたえてください。”というもので、とても好き(7点)、好き(6点)、どちらかというが好き(5点)、どちらでもない(4点)、どちらかというときらい(3点)、きらい(2点)、とてもきらい(1点)のいずれかに○印を付けさせた。第2調査は、「この組(クラス)のお友だち全員から、あなたはどのように思われていると思いますか。」というもので、とても好かれていると思う(7点)、好かれていると思う(6点)、どちらかという好かれていると思う(5点)、どちらでもないと思う(4点)、どちらかというときらわれていると思う(3点)、きらわれていると思う(2点)とてもきらわれていると思う(1点)のいずれかに回答させた。このように、自己が他者に対する選好の程度、他者の自己に対する選好の程度の推定は、いずれも7段階であり、「とても好き」から、「とても嫌い」までに互っていたのである。

クラス別の性別集団内の成員の他の全員に対する選好の程度、他の全員が成員に対する選好の程度の推測を調査したから、(1)各成員(i)が他者(j)に対する選好の程度C(i, j), (2)他者(j)が各成員(i)に対する選好の程度C(j, i), (3)他者(j)が成員(i)に対する選好の程度各成員(i)の認知P(i, j), (4)成員(i)が他者(j)に対する選好の程度他者(j)の認知P(j, i)に関

する資料が得られた。

### III 結 果

#### 1 相互選択集団の重層構造

クラス内の相互選択に着目し, その相互選択が強い選択か, 弱い選択かという段階別に, 選択関係をみることにしよう。クラス内の男女集団は, 選択段階別にみると相互選択関係で強く結合し一体となっているわけではないから, 性別に相互選択が最も強い選択すなわち相互に7評定のもの, 6以上のもの, 5以上のもの等と7つの選択段階に分け, クラス別 性別 選択段階別 相互選択数をみることにする。段階(7), 段階(6以上, 即ち~6), 段階(~5)は, 正の選好であるから, 結合関係を表わしている。しかし, 段階(~3), 段階(~2), 段階(~1)は負の選好であり, 排斥関係ともいえるものである。段階(~4)は結合関係とも排斥関係ともいえない関係である。また, 段階(7), 段階(~6), 段階(~5)は相互に結合関係にあるが, 段階(~3), 段階(~2), 段階(~1)は, 相互選択の一方の者はその段階の排斥を示しているが, 他方の者はその段階かそれ以上の段階の正, 負または正負いずれともいえない選択を行なっていることになる。段階(~4)は一方の者は正, 負いずれともいえない関係であり, 他方の者は, それと同じ段階の正, 負いずれともいえない選択か正の選択でありうる。段階(~3)以下では一方は排斥でありながら, 他方は選択というような混合形態になっているかもしれないのである。それら相互選択者の水準差については, 表14に示されている。

この表1では, クラス別 性別人数と, 7段階別の相互選択数を示している。各クラスの相互選択数の合計は, 当然クラスの成員から2人を取り出す組み合わせ数となる。

各クラスの性別集団における評定段階別の相互選択数は, 評定4以上が最も多く, その段階から上下に相互選択数は減少する。しかし, 段

表1 クラス別 選択段階別 相互選択数

	人数	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1	計
K-M	17	12	14	20	50	16	10	14	136
-F	18	16	12	22	63	20	9	11	153
N-M	23	17	39	78	84	20	9	6	253
-F	21	12	20	38	80	26	21	13	210
計	79	57	85	158	277	82	49	44	752

注) K, Nは, 各クラスを, Mは男子, Fは女子を, 7, ~6, ~5, …は, それぞれ相互選択が共に7のもの, 6以上のもの, 5以上のもの等を示す。

階(~5)の方が, 段階(~3)より多い。各クラスの男女別分布が全体(合計)の分布に適合するかどうかをみると, K-M ( $\chi^2=7.79$ ,  $df=6$ ,  $.20 < p < .30$ ), K-F ( $\chi^2=5.61$ ,  $df=6$ ,  $.30 < p < .30$ ), N-F ( $\chi^2=6.87$ ,  $df=6$ ,  $.30 < p < .50$ )では, 全体分布にほぼ適合している。しかしN-M ( $\chi^2=27.27$   $df=6$ ,  $p < .001$ )では適合しているとはいえない。

#### 2 相互選択の選択段階別 相応性

$S_i$ の $S_j$ に対する相応性は,  $S_i$ の行動に直接効果を及ぼすものと考えられる。ここでは, Tagiuriら(1953)のいう相応性(Perceptual-affective congruency)に相当するものを量的にみることにしよう。相応性は, 自己の他者に対する評定水準と, 他者が自己に対する選択についての自己の認知水準との差であるから, この値が小さいほど相応性がよいということになる。成員(i)の他者(j)に対する相応性の程度を,  $C(i, j)-P(i, j)$ とすると, 相互選択の相手の相応性は $C(j, i)-P(j, i)$ となり, 相互選択をする2者の相応性の平均は,  $\{[C(i, j)+C(j, i)]-[P(i, j)+P(j, i)]\}/2$ となる。

クラス別 性別 選択段階別 相応性の平均

表2 クラス別 性別 選択段階別 相応性の平均

	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1
K-M	.67	.96	.80	.28	.31	.15	-.11
-F	.97	.71	.75	.51	-.05	-.83	-.91
N-M	.91	1.05	.58	.22	-.23	-.39	-.75
-F	1.29	1.35	1.16	.24	.10	-.95	-.77

は表2の通りとなる。選択段階が高い場合には正となり、選択段階が低くなると、負になることが多い。選択段階が高い者相互では自己の他者に対する選択の水準が、他者の自己に対する選択の認知よりも大きく、逆に選択段階が低い者相互では自己の他者に対する選択の水準より、他者の自己に対する選択の認知が大きいことを示している。相応性の平均をクラス、性、選択段階等の要因により分散分析を行うと、選択段階間 ( $F_{(6,730)}=23.7221, P<.005$ )、クラスと性の交互作用 ( $F_{(1,730)}=3.9006, P<.05$ )、選択段階と性との交互作用 ( $F_{(6,730)}=6.8081, P<.005$ ) において分散が有意である。

表3 クラス別 性別 選択段階別 相応性の標準偏差

	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1
K-M	.69	1.02	1.05	.92	1.26	1.28	1.48
-F	.85	.84	.71	.80	1.09	.65	1.86
N-M	1.17	1.20	1.01	.93	1.37	1.98	1.09
-F	1.67	1.46	1.70	1.19	1.36	1.50	1.89

相応性の標準偏差をクラス別 性別 選択段階別に示したのが表3である。クラスで選択段階間の傾向に違いがあるが、クラスNでは段階(~4)が小さく、上下に段階が隔たるにつれて、大きくなる傾向がみられる。K-Mでは修正した  $\chi^2=10.7704, df=6, p<.10$ , K-Fでは  $\chi^2=25.2930, df=6, p<.001$ , N-Mでは  $\chi^2=18.7558, df=6, p<.005$ , N-Fでは  $\chi^2=11.1579, df=6, p<.10$ であり、K-FおよびN-Mでは有意である。

クラス別 性別 選択段階別 相応性別 選択数および相応性の計を示すと表4の通りとなる。この分布から、相応性は、0の者即ち、実際の選択に応じた認知をするものが多い。特に選択段階(~4)の者では顕著である。このことは、自分が選好する者に対しては、それに応じた程度にその者も自分を選好するという傾向があることを示している。つまり、自分が好きだと思う相手は自分を好きだと思い、嫌いだと

表4 クラス別 性別 選択段階別 相応性別 選択数および相応性の計

K-F	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1	計
3~		1	2	3	2	1	1	10
2	3	8	6	6	1	2	5	31
1	10	11	17	21	8	5	2	74
0	11	5	11	59	13	4	12	115
-1		3	4	8	8	7	4	34
-2				3		1		4
~-3							4	4
相応性	16	27	32	28	10	3	-3	

K-F	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1	計
3~	2			2				4
2	5	5	5	12	4			31
1	15	8	25	41	7	1	6	103
0	10	10	12	64	16	9	6	127
-1		1	2	7	9	3	2	24
-2					4	4	4	12
~-3						1	4	5
相応性	31	17	33	64	-2	-15	-20	

N-M	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1	計
3~	7	13	9	5	1	2		37
2	1	7	9	7	2			26
1	8	28	57	34	8	1	1	137
0	18	28	69	103	15	6	5	244
-1		2	10	15	7	5	3	42
-2			2	1	5	2	2	12
~-3				3	2	2	1	8
相応性	31	82	91	37	-9	-7	-9	

N-F	7	~6	~5	~4	~3	~2	~1	計
3~	3	4	11	7	2		1	28
2	5	12	12	9	4	1	1	44
1	6	12	25	31	10	8	3	95
0	10	11	18	83	16	9	11	158
-1		1	9	23	18	6	1	58
-2			1	6	2	11	4	24
~-3				1		7	5	13
相応性	31	54	88	38	5	-40	-20	

思う相手は自分を嫌っていると思う傾向があるという相応性の仮説を支持するといえる。しかし、選択段階がそれ以上になると、実際の選択が認知を上回るものが多くなり、その方向にか

なり逸脱するものも多い。選択段階 (~4) 以下になると、認知が実際の選択を上回る傾向がみられ、その方向にかなり逸脱するものが多い。このことは、選択段階別 相応性の平均が段階 (~4) 以上では正の値となり、それ以下では負の値となるという前表の結果と符合している。これらの結果は、相互選択をするもの同士の相互選択の程度に応じて段階を分けて、相応性を調べているから、認められるものかもしれない。

クラス別 性別 選択段階別 相応性の差異別 相互選択数を示すと表5のようになる。相

互選択者の相応性の差異がないものか1程度のものが、段階(~4)では最も多く、段階(~5), (~6), (~7)でもほとんど同様である。しかし、段階(~3), (~2), (~1)では差異が大きくなる傾向が認められる。ただし、N-Fの段階(~5)は段階(~3)以下の場合と類似している。当然のことながら、「好きでも嫌いでもない」段階(~4)の者は相手との相応性に類似する。しかし「好き」の段階では、「嫌い」の段階と比べて、相対的に大きい差異を示すことは少ない。

表5 クラス別 性別 選択段階別 相応性の差異別 相互選択数

	相応性の差異別					計
	0	1	2	3	4 5~	
(7)						12
(~6)	3	8	1			14
(~5)	2	10	1	1		20
K-M(~4)	8	6	2	3	1	50
(~3)	23	16	6	3	1	16
(~2)	2	7	5		1	10
(~1)	1	4	3	1	1	14
(7)						16
(~6)	4	9	3			12
(~5)	2	9	1			22
K-F(~4)	9	11	2			63
(~3)	21	27	14	1		20
(~2)	8	4	5	1	2	9
(~1)	3	4	1			11
(7)						17
(~6)	3	8	1	5		39
(~5)	12	13	9	4		78
N-M(~4)	29	27	11	8	3	84
(~3)	33	35	8	7	1	20
(~2)	4	7	5	2	1	9
(~1)	1	3	2	1	2	6
(7)						12
(~6)	5	3	1	1		20
(~5)	3	8	5	1	2	38
N-F(~4)	2	16	6	7	3	80
(~3)	28	30	15	5	2	26
(~2)	4	8	10	2	1	21
(~1)	3	6	4	6	2	13

表6 クラス別 性別 相互の相応性の対別 相互選択数

	相互の相応性の対別							計
	(-4; X <sub>1</sub> )	(-3; X <sub>2</sub> )	(-2; X <sub>3</sub> )	(-1; X <sub>4</sub> )	(0; X <sub>5</sub> )	(1; X <sub>6</sub> )	(2; X <sub>7</sub> )	
(7)					9	3		12
(~6)				2	4	8		14
(~5)				4	9	6	1	20
K-M(~4)			3	7	36	4		50
(~3)				8	8			16
(~2)			1	6	2	1		10
(~1)	1	3		4	6			14
(7)					9	6	1	16
(~6)				1	7	4		12
(~5)				2	9	11		22
K-F(~4)				6	48	9		63
(~3)			5	8	5	1	1	20
(~2)	1	3		2	3			9
(~1)	3	2	3		4			11
(7)					15	1	1	17
(~6)				2	21	13	3	39
(~5)			2	10	49	17		78
N-M(~4)		3	1	15	60	4	1	84
(~3)	1	1	5	6	6	1		20
(~2)	1	1	2	4	1			9
(~1)		1	2	3				6
(7)					7	4	1	12
(~6)				1	10	7	2	20
(~5)			3	9	11	14	1	38
N-F(~4)		1	6	18	46	9		80
(~3)			2	17	6	1		26
(~2)	1	5	9	4	1	1		21
(~1)	3	2	3	1	4			13

注) 相応性の対 (-4; X<sub>1</sub>), (-3; X<sub>2</sub>) … (2; X<sub>7</sub>) 等は、相互の相応性が相対的に低い相応性を、-4, -3, …で示し、それと同じか又はそれより高い相手の相応性をX<sub>1</sub>, X<sub>2</sub>, …で示している。例えば、(-4, X<sub>1</sub>)には、(-4, -4), (-4, -3), (-4, -2) …が含まれ、(0; X<sub>5</sub>)には、(0; 0), (0; 1), (0; 2) …が含まれる。なお、(-4; X<sub>1</sub>)欄には(-6; X), (-5; X)の度数を若干含んでいる。

クラス別 性別 相互の相応性の対別 相互選択数を示したのが表6である。段階（～5），（～6），（7）では（0；X<sub>5</sub>），（1；X<sub>6</sub>）などが最も多く、段階（～4）では（0；X<sub>5</sub>）が断然多い。段階（～3）以下では、負の相応性を一方のものが示す対が多くなり、段階が下降すると、負の相応性も極端になる。これらのことは、選択段階が高い相互選択では、自己の選好の程度より、他者が自己を選好するという認知の程度が小さいが、選択段階の低い相互選択では、逆の場合が多くなり、自己が選好する程度より、他者が自己を選好するという認知の程度が高い。その差異は、選択段階が下降するに連れて極端になることを示唆している。つまり、自分が好ましく思う相手は、それほど自分を好ましくは思っていないだろうと認知し、自分が嫌っている相手は、それほど自分を嫌っているとは認知しないという様に、認知の方が自分の選好より穏当なものとなるのである。

3 相互選択の選択段階別 認知の正確性

Tgiuri らのいう正確性 (accuracy) に対応する。S<sub>i</sub> の S<sub>j</sub> に対する認知 P (i, j) の正確性は、S<sub>j</sub> の S<sub>i</sub> に対する選択 C (j, i) と S<sub>j</sub> の S<sub>i</sub> に対する S<sub>i</sub> の認知 P (i, j) を比較することによって可能となる。S<sub>j</sub> の S<sub>i</sub> に対する S<sub>i</sub> の認知 P (i, j) の正確性をここでは C (j, i)-P (i, j) とする。相互選択の相手の認知の正確性は C (i, j)-P (j, i) となる。相互選択をする 2 者の認知の正確性の合計は、{C (j, i)+C (i, j)}- {P (i, j)+P (j, i)} となる。これは、相応性の合計と等しいのは明らかである。クラス別 性別 選択段階別 認知の妥当性の平均は、相応性の平均と同一となるので省略するが、分散分析の結果は、選択段階間 (F<sub>(6,730)</sub>=12.8342, P<.005), 選択段階と性の交互作用 (F<sub>(6,730)</sub>=3,6833, P<.005) で有意となる。

クラス別 性別 選択段階別 認知の正確性の標準偏差を示したのが、表7である。N-M 以外では標準偏差間にかなりの違いが認められる。K-M では、修正した  $\chi^2=19.5076$ , df = 6,

表7 クラス別 性別 選択段階別 認知の正確性の標準偏差

	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
K-M	.69	1.25	1.45	1.55	1.93	2.54	2.02
-F	.85	1.46	1.23	1.07	1.45	1.80	2.27
N-M	1.17	1.29	1.48	1.37	1.77	2.26	2.05
-F	1.67	1.64	1.57	1.39	2.10	2.61	3.46

表8 クラス別 性別 選択段階別 認知の正確性別選択数および正確性の計

K-M	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～		2	6	10	5	3	4
2	3	8	8	12	5	3	3
1	10	8	9	17	5	6	2
0	11	7	8	30	5		7
-1		3	7	20	6	1	5
-2			2	8	3	2	2
～-3				3	3	5	5
正確性	16	27	32	28	10	3	-3

  

K-F	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～	2	4	3	5	3	1	3
2	5	4	7	18	3	1	
1	15	4	20	31	5	2	4
0	10	5	7	55	14	1	2
-1		7	4	15	10	6	3
-2			3	2	3	4	3
～-3					2	3	7
正確性	31	17	33	64	-2	-15	-20

  

N-M	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～	7	8	12	11	3	2	
2	1	24	28	15	3	2	3
1	8	20	54	34	6	5	1
0	18	14	23	66	9		2
-1		12	20	28	14	1	
-2			19	8	1	5	2
～-3				6	4	3	4
正確性	31	82	91	37	-9	-7	-9

  

N-F	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～	3	9	14	12	6	4	7
2	5	9	15	15	7	6	1
1	6	10	25	32	12	6	1
0	10	5	7	62	5	1	2
-1		7	13	24	9	3	3
-2			2	11	7	8	1
～-3				4	6	14	11
正確性	31	54	88	42	5	-40	-20

$p < .005$ , K-F では  $\chi^2 = 22.1769$ ,  $df = 6$ ,  $P < .005$ , N-M では  $\chi^2 = 12.1304$ ,  $df = 6$ ,  $p < .10$ , N-F では  $\chi^2 = 36.6820$ ,  $df = 6$ ,  $p < .001$  という具合であり, N-M 以外では有意である。

クラス別 性別 選択段階別 認知の正確性別 選択数および正確性の計を示すと表8のようになる。正確性の標準偏差の表7でも見られた如く, 選択段階が高い場合には分布の範囲は狭く, 正確性が負になることは少ない。しかし段階(～4)以下になると, 正確性が負となること, しかも-3かそれ以下の正確性を示すものが増加し, 分布の幅も広い。

#### 4 選択段階別 相互認知関係

相互認知関係を相互認知の相違, 即ち  $P(i, j) \sim P(j, i)$  をみることにしよう。この相違は, 直接社会的効果を及ぼすことはないと考えられる。しかし, この対人認知の相互性が顕現化してそごをきたすことが生じることもありうる。それは互いの対人認知や, 選好に影響するであろう。

表9 クラス別 性別 選択段階別 認知水準差の平均

	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
K-M	.83	1.00	1.45	1.16	1.31	1.90	1.86
-F	.94	1.67	.82	.60	.95	1.44	.91
N-M	1.47	1.23	1.38	.86	1.40	1.56	1.83
-F	1.50	1.90	1.71	.96	1.46	1.62	2.62

対人認知における相互性 (mutuality) に関する分析を試みよう。表9は, クラス別 性別 選択段階別 認知水準差の平均を示したものである。これは, 認知水準の評定の高いものから低いものを差し引いた値の平均値である。クラス別 性別集団の選択段階毎の認知水準差の平均を用いてクラス, 性, 選択段階の3要因による分散分析を行うと, 性差は有意でないが, クラス間 ( $F_{(1,730)} = 12.4529$ ,  $P < .005$ ), 選択段階間 ( $F_{(6,730)} = 5.6956$ ,  $P < .005$ ), クラスと性の交互作用 ( $F_{(1,730)} = 10.2123$ ,  $P < .005$ ) は有意である。

表10 クラス別 性別 選択段階別 認知水準差の標準偏差

	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
K-M	.55	.57	1.02	.97	1.10	1.22	1.30
-F	.66	.62	.89	.61	.80	1.26	1.36
N-M	1.09	1.05	1.10	.98	1.11	.83	1.07
-F	1.80	1.18	1.36	.95	1.30	1.33	1.64

表11 クラス別 性別 選択段階別 認知水準差別 相互選択数および水準差の計

K-M	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～			3	3	2	3	4
2	1	4	5	12	4	4	4
1	8	6	9	23	6	1	4
0	3	4	3	12	4	2	2
水準差	10	14	29	58	21	19	26

  

K-F	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～		1	1			2	2
2	3	6	4	4	6	1	1
1	9	5	7	30	7	4	2
0	4		10	29	7	2	6
水準差	15	20	18	38	19	13	10

  

N-M	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～	5	3	13	8	4	1	2
2	1	11	17	11	3	4	2
1	8	15	32	26	9	3	1
0	3	10	16	39	4	1	1
水準差	25	48	108	72	28	14	11

  

N-F	7	～6	～5	～4	～3	～2	～1
3～	3	5	9	8	5	4	7
2	1	7	11	11	6	7	2
1	3	6	10	31	8	5	2
0	5	2	8	30	7	5	2
水準差	18	38	65	77	38	34	34

相互選択の対象についての認知水準差をクラス別 性別 選択段階別に示したのが表10である。クラス別 性別の標準偏差が選択段階間で相違するかどうかをみると, クラスによって多少異なるようである。Kクラスでは選択段階が下降するにつれて, 大きくなるが, Nクラスでは, 段階(～4)で小さく, その上下の段階で

大きくなるという傾向が見られる。K-Mでは修正した $\chi^2=14.4390$ ,  $df=6$ ,  $P < .05$ , K-Fでは $\chi^2=36.5516$ ,  $df=6$ ,  $p < .001$ , N-Mでは $\chi^2=17.0937$ ,  $df=6$ ,  $p < .01$ , N-Fでは $\chi^2=40.7817$ ,  $df=6$ ,  $P < .001$ で、いずれも有意である。

クラス別 性別 選択段階別 認知水準差別 相互選択数および水準差の計を示すと表11のようになる。認知水準の平均及び標準偏差によっても見ることができるが、段階（～4）では、比較的水準差が小さい。段階（7）はもちろんのこと、表14に示される段階（～6）、（～5）における相互選択者相互の選択の水準差に比較すれば、相互の認知水準差は大きい。特に、Nにおける段階（7）、（～6）では認知水準差が著しい。

5 選択段階別 相互選択関係

相互選択における水準差は、 $C(i, j) - C(j, i)$ である。段階（7）は相互選択をする者が共に7の選択をしている場合であるから、水準差はない。また、段階（～6）の場合も、相互選択をするもの相互は（6；7）というように水準差は最大1である。段階（～5）では水準差の最大は2というように段階によって、水準差が制約を受け、これが以下の結果にも影響している。この点は考慮しておかなければならないであろう。

表12 クラス別 性別 選択段階別 相互選択水準差の平均

	～6	～5	～4	～3	～2	～1
K-M	.50	1.35	1.32	2.06	2.60	2.36
-F	.75	.95	1.05	1.65	1.56	2.91
N-M	.67	1.04	1.11	1.85	3.00	2.33
-F	.80	.92	.91	2.27	2.95	3.85

相互選択における相互性 (mutuality) に関する分析を試みることにしよう。相互選択の選択水準差の平均をクラス別 性別 選択段階別に示したのが表12である。この選択水準差は、高い評定値から低い評定値を差し引いた値の平均

である。段階（7）の場合は、相互選択が共に7のものであり、選択水準差はない。段階（～6）のもの、段階（～5）のものと段階が進むと大きな選択水準差となる可能性が生じる。相互選択水準差の平均をクラス、性、選択段階等の要因による分散分析を行うと、クラス間 ( $F_{(1,676)} = 6.0529$ ,  $P < .05$ ), 選択段階間 ( $F_{(5,676)} = 65.1833$ ,  $P < .005$ ), クラスと性の交互作用 ( $F_{(1,676)} = 7.9209$ ,  $P < .01$ ), クラスと選択段階の交互作用 ( $F_{(5,676)} = 3.4654$ ,  $P < .01$ ), 選択段階と性の交互作用 ( $F_{(5,676)} = 3.4881$ ,  $P < .01$ ) が有意である。

Tagiuriら (1953) のいう相互性 (mutuality) が選択段階によって異なることを示している。

表13 クラス別 性別 選択段階別 相互選択水準差の標準偏差

	～6	～5	～4	～3	～2	～1
K-M	.50	.32	1.12	1.14	1.84	1.44
-F	.43	.71	.81	1.19	.68	1.44
N-M	.47	.78	.98	1.11	2.00	.56
-F	.40	.66	.90	1.06	1.09	3.05

相互選択水準差の標準偏差をクラス別 性別 選択段階別に示したのが表13である。クラス別性別の標準偏差が選択段階間で相違するかどうかをみると、選択段階（～6）や段階（～5）では小さく、段階（～2）や段階（～1）になるにつれて増大する傾向にある。クラス別性別の標準偏差（不偏分散）は、選択段階間で相違していることが明らかである。K-Mでは、修正した $\chi^2=49.2783$ ,  $df=5$ ,  $P < .001$ , K-Fでは $\chi^2=40.5541$ ,  $df=5$ ,  $P < .001$ , N-Mでは $\chi^2=69.8005$ ,  $df=5$ ,  $P < .001$ , N-Fでは $\chi^2=130.0612$ ,  $df=5$ ,  $P < .001$ で総てのクラス別 性別集団で有意となっている。

クラス別 性別 選択段階別 水準差別 相互選択数および水準差の計を示すと表14の通りとなる。この相互関係も顕在的なものではないが、折に触れ顕在化して社会的効果を持つものと考えられる。一方の選好が、他方に伝わり、



表14 クラス別 性別 選択段階別 水準差別 相互選択数および水準差の計

K-M	~6	~5	~4	~3	~2	~1
3~			9	8	4	5
2		8	15	1	4	5
1	7	11	9	6	2	3
0	7	1	17	1		1
水準差	7	27	66	33	26	33

  

K-F	~6	~5	~4	~3	~2	~1
3~			2	5	1	7
2		5	16	4	3	2
1	9	11	28	8	5	2
0	3	6	17	3		
水準差	9	21	66	33	14	32

  

N-M	~6	~5	~4	~3	~2	~1
3~			10	6	6	3
2		25	15	4	1	2
1	26	31	33	9	2	1
0	13	22	26	1		
水準差	26	81	93	37	27	14

  

N-F	~6	~5	~4	~3	~2	~1
3~			5	9	12	10
2		7	14	10	8	1
1	16	21	30	7	1	1
0	4	10	31			1
水準差	16	35	73	13	62	50

他方の選好または認知に影響する。この表の分布の傾向も、水準差の平均または標準偏差で見られたものでもあるが、段階(~6),段階(~5)では水準差は小さく、段階が高くなるのに連れて、水準差が大きくなる。

#### IV 考 察

この研究では、相互選択の強度による重層構造を把握し、各層での対人関係、特に相応性、正確性、相互性等を量的な面から検討した。強い相互選択を中心とする集団の構造は、しばしば検討されてきたが、ここでは選択強度の段階

別に集団の構造を把握することにした。その結果、強い正の選択から、強い負の選択に至るまでの重層構造を捉えることができた。この手法は、ソシオメトリーの結果の分析に広く適用可能と考えられる。ソシオメトリック調査の場合は、相互選択関係がかなり限定されるから、集団やその構造が鮮明に浮かび上がるであろう。スターや孤立児等の社会的地位との関連も明らかになると思われる。

対人認知の相応性と正確性、相互性等を量的な面から検討したが、相互性には認知的相互性と選択の相互性が取り上げられた。この認知的相互性の位置付けはさらに検討しなければならないと思われる。また、相応性、正確性、相互性の関連については今後の問題として残された。これらの点についてもさらに考察しなければならない。

ここで検討した相互の選択及びその認知に関する対人関係は、相互の性格の認知にも深い関連を持つと考えられる。この関連についても今後の問題として残されている。

クラス間の比較や性別集団の比較については、ここでも行った。しかし、クラスの編成の仕方やその経過が背景として考慮されなければならない。

#### 付記

ここで分析した調査結果は、大野 千恵子が、金沢大学教育学部大学院在籍中に修士論文作成のために昭和63年11月に実施したものの一部を、筆者が観点を変えて分析したものである。

#### 参 考 文 献

- Asch, S. E., 1946, Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Bender, I. E. and A. H. Hastorf, 1953, On measuring generalized empathic ability (social sensitivity). *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 503-506.
- Bruner, J. S., and R. Tagiuri, 1954, The perception of

- people. in G. Lindzey (ed), *Handbook of social psychology*, vol. II
- Cronbach, L. J., 1955, Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- Dymond, R. F., 1949, A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Dymond, R. F., 1950, Personality and and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.
- Fiedler, F. E., A contingency model of leadership effectiveness. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*. 1964.
- Hastorf, A. H. and I. E. Bender. 1952. A caution respecting the measurement of empathic ability. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 574-576.
- Hastorf, A. H., D. J. Schneider, and J. Polefka, 1970, Person perception. 高橋雅春訳, 1978, 対人知覚の心理学 (キースラー, C. A. 編, 広田君美監修, 現代社会心理学の動向 第2巻)
- Heider, F. 1958, The psychology of interpersonal relations. 大橋正夫訳, 1978, 対人関係の心理学.
- Jourard, S. M. and P. Lasakow, 1958, Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.
- 梶田毅一, 1967, 自己評価と自己のパフォーマンスの評価——他者に感じる魅力を規定する要因として. *心理学研究*, 38, 63-72.
- Laing, R. D., 1961, *Self and Others.*, 志貴春彦, 笠原嘉訳, 1975, 自己と他者
- Markus, H. and R. B., Zajonc The cognitive perspective in social psychology. in G. Lindzey, and E. Aronson, (eds.) 1985, *Handbook of social psychology* (third edition) Vol. I, 137-230.
- 太田雅夫, 1986, 対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について, 金沢大学教育学部 教育工学研究, 第12号, 79-91.
- 太田雅夫, 1986, 対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について(2), 金沢大学教育学部 教科教育研究, 第22号, 265-270.
- Tagiuri, R. 1952. Relational analysis; an extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 15, 91-104.
- Tagiur, R., R. R. Blake, and J. S. Bruner, 1953, Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 585-592.